



OECDのオープンサイエンスレポートと日本の現況

文部科学省 科学技術・学術政策研究所

科学技術動向研究センター 林 和弘

オープンサイエンス推進に関するフォローアップ検討会（第4回）

2016年1月28日(木)

OECDレポートの示唆と日本



・OECDレポートは、オープンサイエンスに関して、幅広い観点から現状と課題をまとめており、この、レポートに挙げた点について他国との比較を行うことで様々な示唆を得ることができる。

日本においては、

- ・自発的にオープンサイエンスの可能性を取り込む取組が研究者コミュニティを中心に加速し始めている。(理工系、人社系共)
- ・データ科学研究だけではなく、研究データ共有を研究する研究者、データ科学専攻学部を立ち上げる大学も出始めた。(ROIS、筑波大学、滋賀大学)
- ・クラウドファンディングや日本発のOA出版者も立ち上がっている。
- ・研究助成団体は慎重に対応。(JSTのOA推奨(2013))
- ・法規制、産業振興の観点の取組が弱い。
- ・国際連携の取組の中の日本のプレゼンスはまだ弱い。

見通し



・ネガティブ

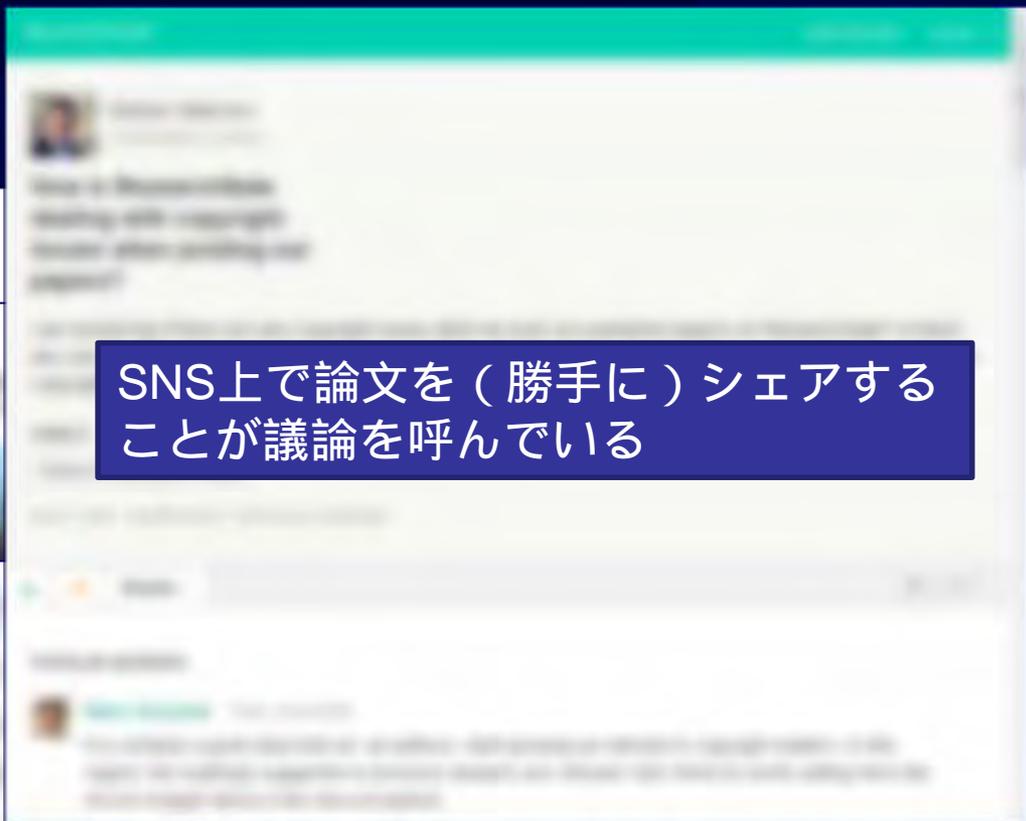
- ü 局所的にはすでに欧米追従の様相(exデータジャーナル)
- ü 既存の根強い慣習を変える難しさ(含む法改正)

・ポジティブ

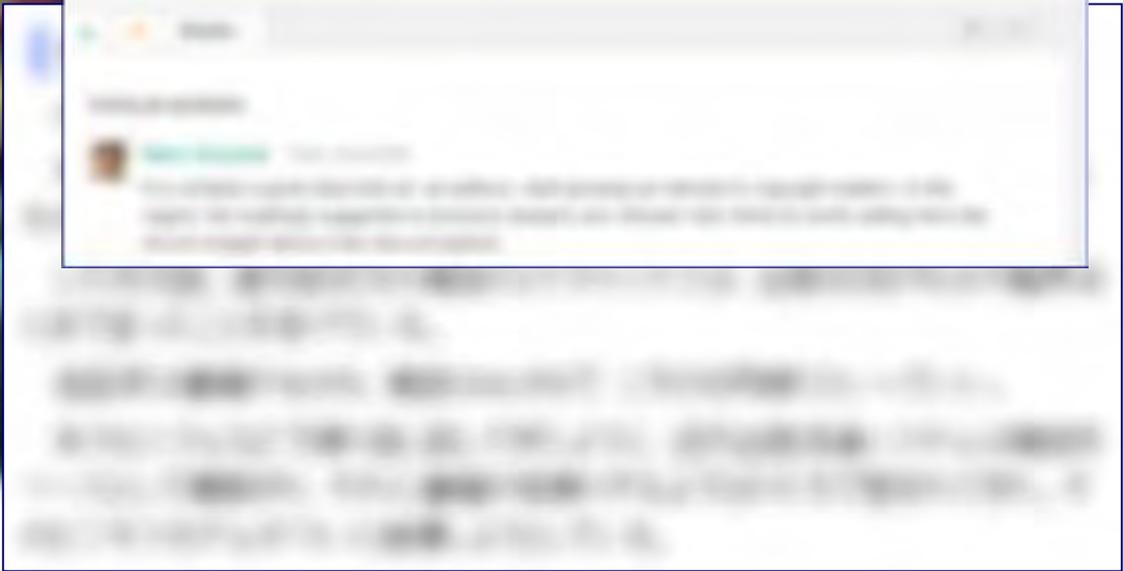
- ü 自発的に動くコミュニティは(すでに、新たに)様々に存在
- ü 学術情報流通ビジネスの新展開はチャンス
- ü 日本が初めて新しい「科学」の在り方の開発に本格的に参画できるチャンス(cf 明治の科学の輸入)

最近の事例

ゲームチェンジの兆し



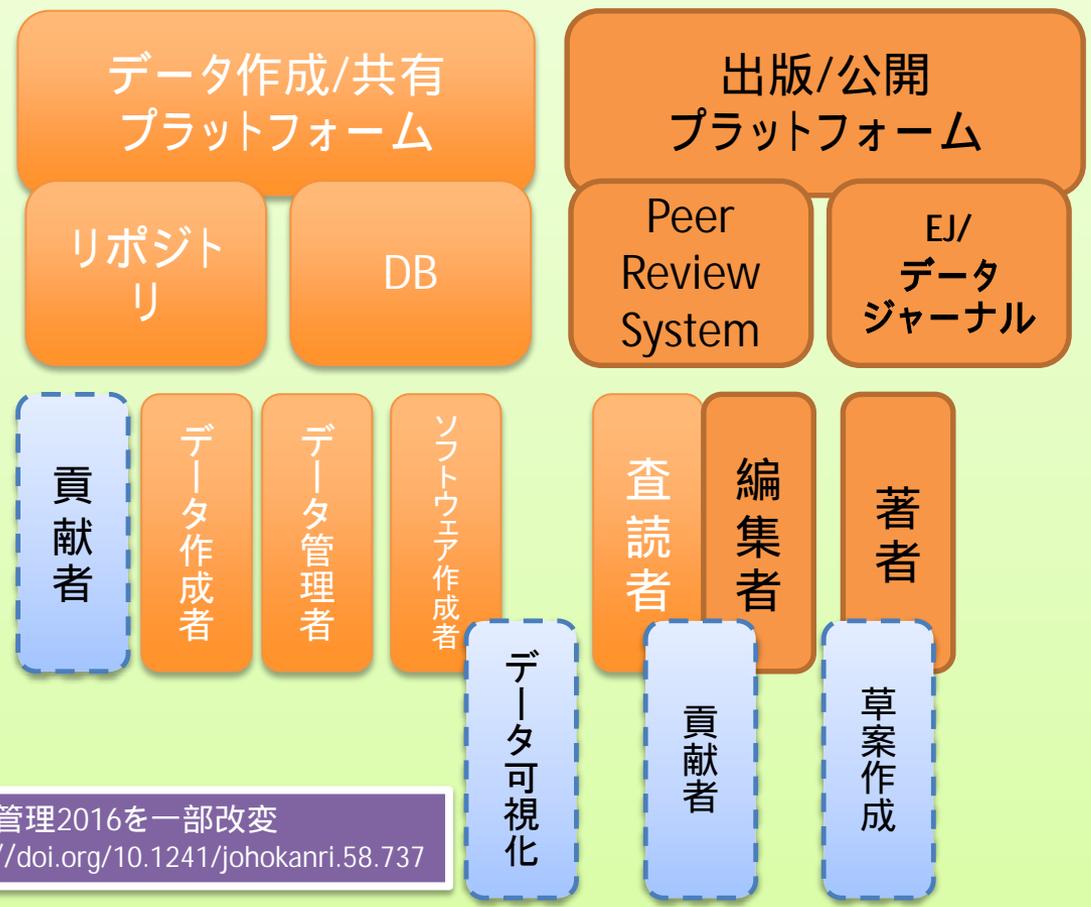
SNS上で論文を（勝手に）シェアすることが議論を呼んでいる



<http://jp.wsj.com/articles/SB10519349150193173538704581499900801192030>

<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/20151201/1448895608>

- 確立
- 実装
- 検討

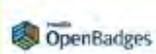


情報管理2016を一部改変
<http://doi.org/10.1241/johokanri.58.737>

← より上流、多様な貢献者の捕捉

識別子による管理

(DOI, ORCID等)



新しい資金獲得の仕組み

学術システム

新しい出版、情報共有の仕組み

新しいインパクトアセスメントと評価への応用

- 確立
- 実装
- 検討

SNSの拡張

研究プラットフォーム

(研究活動マネジメント、トラフィック管理、ログ、メトリクス)

研究が加速、効率化し、研究者に限らない貢献者が見える仕組みとサービス

着想、研究費調達、人材獲得、執行、管理プラットフォーム

データ作成/共有プラットフォーム

出版/公開プラットフォーム

ツール/サービス

リポジトリ

DB

Peer Review System

EJ/データジャーナル

貢献者

貢献者

貢献者

コンセプト化

初期分析

貢献者

データ作成者

データ管理者

ソフトウェア作成者

査読者

編集者

著者

資金調達者

手法開発

調査

プロジェクト管理

テスト

情報管理2016を一部改変
<http://doi.org/10.1241/johokanri.58.737>

データ可視化

貢献者

草案作成

より包括的、トレーサブルに把握

より上流、多様な貢献者の捕捉

次世代の科学研究成果のフェアユースとは



2014年度の報告書の反応も併せた上での示唆

- ・「多様なステークホルダー」が集まり、
- ・十分な「対話を繰り返す」ことで、
- ・「オープンサイエンスの可能性」を前提に、（特に研究成果の共有の新展開）
- ・「次世代の科学研究成果のフェアユース」に関するコンセンサス(文化)作りと、
- ・それに応じた「法規制ならびに産業作り(に係る政策)」が必要。